

大楽毛物語 ②



写真/釧路湿原

明治33年(1900年)の釧路の人口は2千戸、約1万人と、前号に書いた通りだが、それから100年たった今は20万人となった。20倍になったのだからだんだん増えるのかと思つたら、毎年少しづつ減っているのだからちと淋しいことです。ところで、その頃大楽毛には30戸、1500人余の集落が形成されていたが、釧路から4里(12キロ)も

あるから大変です。今なら車でひとつ走り、10分位で着いちやうけど昔は歩くか馬車。やつぱり釧路まで出かけるとなると半日がかりの「大仕事」というわけだ。そんな時、白糠まで汽車ポッポが走って駅まで出来ちゃったんだから、大楽毛の人たちにとって青天のへきれきというものだ。蒸気機関車から吐き出る煙なんが嬉しい香り。

「今日も釧路に行つてきた」と、自慢する若者は、今まで年に2、3回しかマチに行ったことがなかったのに、半月で5回も6回も。しかし、大楽毛の人たちのことをお話するには、やつぱり鳥取村のことがどうしても出てきます。大楽毛に移り住んだ人たちの大半は、最も近い鳥取村出身の人たちが多いからです。鳥取村はもろろん当時の阿寒川と海の間にはさまれた谷地(湿地)帯に広がる村のことです。鳥取藩は32万5千石。山陰地方の雄藩でした。田舎侍のはいくれだと思つたら、なかなかの「できぶつ」だったので。藩祖以来、当主の慶徳公まで勇武剛直の土風。明治ご一新、同4年に廃藩置県、四民(士、農、工、商)平等の布令が出てまずは断髪そして廃刀。武士の面影はまず姿形から無くなつちまったのだから、本人たちにすれば威厳も何も

ありやしない。明治9年には島根県に併合されるに及んで、旧士族たちの不満は頂点に達しヤカンのお湯も沸く。旧禄高に依じて支給された公債も政府の金札乱発で反古同然となってインフレが増長、彼らの生活はドン底にうごめいた。ここで立ち上がったのは足立、小倉の両志士。鳥取本町の角屋敷に「共幣社」という看板をあげて、失業者族たちに呼びかけた。共幣とは「共に死んで頑張る?」というんだから並じゃない。死ぬ覚悟があれば、何でもできるつていうわけだ。まず①鳥取県再置の公益を旨とした商業活動の奨励拡大など5項目にわたつて賛同を求めたら、集まること500人余。「共幣社」はみるみる「共生社」に変わり商売繁盛となった。しかしこれとて失業士族の糊口に足るものではなかつた。この頃、鳥取ばかりでなく、佐賀、熊本、

山口、鹿児島でも似たような暴動が起き、とくに「共幣社」の動きに頭を痛めた。さらに騒がれては大変と、鎮撫使を派遣、足立、小倉の両名は山県有朋と会つて「鳥取の再置、共幣社の解散」で、落ち着いた。この時決まったのが鳥取旧藩士たちの北海道行きだった。「北方の防備」は旧士族のころをくすぐるものであり、また鳥取に残つてあつたのある目が探せなかつたこともあつた。

明治14年の9月、鳥取県は再置され、士族一千人に限つて北海道移住を許可するという政府の内意をもつて赴任したのは県令の山田信道。その翌春には足立、小倉に武田貞明を加え、学者で名望家の竹田端治が県令の嘱託となり、この4人に加え属官も随行して北海道視察と相なつた。北海道函館は春の盛り、蝦夷地に対する偏見が消えた。(つづく)

北海道新聞

(有)丹葉新聞店

釧路市大楽毛5丁目8の1

TEL:57-8228

購読お申し込みは

フリーダイヤル ヨムヨ・ドーシン
0120-464-104

または右記販売所へ